

日本に在留する外国人における健康感の文献研究

(在留外国人／健康感／疾病予防)

廣澤有香¹⁾・坂根可奈子²⁾・古賀美紀²⁾

Literature Review of Sense of Health With Foreign Residents from Asia

(Foreign Residents / Sense of Health / Disease Prevention)

Yuka HIROSAWA, Kanako SAKANE, Miki KOGA

【要旨】本研究では、15の和文・英文文献から、在留外国人の健康感とその関連要因を明らかにする目的として文献研究を行った。文献から健康感と健康感への影響要因を質的に分析した。在留外国人の健康感に客観的測定尺度を用いた評価と、自ら判断する方法によって評価された。健康感に影響する要因は、母国の要因と日本の要因に分けられた。在留外国人は異文化への適応や移住、マイノリティゆえの経済的問題から特徴的な精神状況や健康課題を抱えていた。また、母国に多い感染疾患に対し、慢性疾患には身体的な自覚が乏しいと考える。在留外国人が日本での疾病予防や早期受診などを促進するために、医療従事者は在留外国人の疾病や受診に影響する文化背景に注目した支援体制の整備をする必要がある。

I. 緒 言

日本の総在留外国人数は、2019年末約293万人で過去最高を更新している¹⁾。2019年の出入国管理及び難民認定法改正で、新たな在留資格の特定技能が追加され²⁾、外国人の在留は中長期になることが予測される。在留外国人の主要な死因は、1960年代の結核や不慮の事故から、現在では悪性新生物、心疾患、脳血管疾患などの慢性疾患へ変化している³⁾。さらに、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患での死亡が男女ともに日本人より在留外国人の割合が高く⁴⁾、在留外国人の慢性疾患への対策が重要である。特に、就労を目的とした在留が多くなっている近年、在留外国人の年齢別人数は成人期が全体の約8割を占めている⁵⁾。在留外国人の医療における対策には、医療提供体制の整備だけでなく、成人期から疾病予防において自らの行動が必要となる。在留外国人が自ら行動するために、本人の健康状態に対する自己評価をどのような視点で捉えているのかが重要であるが、日本人の健

康感に関する論文は散見するが在留外国人のものは見当たらない。

今後増加が予測される在留外国人の疾病予防につながる健康感とその関連要因について文献検討することで、在留外国人の支援のあり方を検討する。

1. 研究目的

日本に在留する外国人の健康感とその関連要因を明らかにし、日本での疾病予防の支援のあり方を検討する。

2. 用語の操作的定義

1) 健康感

甲斐(2008)の研究¹⁰⁾を参考に、当事者が自身の状態(身体的・精神的・社会的)から健康状態をどのように評価するかと定義する。

一方、健康観は、健康の概念を示し、人々が健康にどのくらい価値を置くかも含まれるものであり、広い範囲で健康に焦点を当てている点で本研究の健康感と区別をしている。

¹⁾ 大手前大学国際看護学部

Department of Adult Nursing, Faculty of Global Nursing, Otemae University

²⁾ 島根大学医学部基礎看護学講座

Department of Fundamental Nursing, Faculty of Medicine, Shimane University

II. 方 法

1. 文献検索方法

文献の選定方法は、日本の文献のデータベースとして

医学中央雑誌Web版Ver5を用いた。在留外国人の健康感を適切に示すため、検索式を「外国人」and「健康」としたが、該当文献は抽出されなかったため「外国人」and「健康」とした。海外文献についてはPubMedを用い、検索式を「Living in Japan」and「Health」としたが、該当の文献が抽出されず、キーワードを「Living in Japan」とした。文献検索は2021年11月4日に行った。(図1)

言語は日本語と英語とし、論文の種類は原著論文と研究に限定し、会議録を除いた。文献の選定手順は図1のとおりである。キーワード検索により689文献が抽出された。タイトルと抄録を再考し、日本に在留する子どもをもつ外国人の子どもに対する健康行動や、周産期の在留外国人、高齢者など成人期に該当しない在留外国人、外国人の健康問題に対処する医療者を対象とした文献は除外し、健康感について触れられているものを選定した。本文を精読し、健康感の言葉が用いられていない場合でも、自身の健康状態を評価する内容を示す研究を対象とし、最終的に15文献が対象となった。(表1)

2. 分析方法

在留外国人の動向を把握するために、研究論文を発表年、研究対象者の出身国、対象者の属性について分類した。次に、健康感についての判断基準、健康感に影響を与える要因について読み取り、整理した。分析結果については、研究者間で内容や分類について検討し、妥当性を高めた。

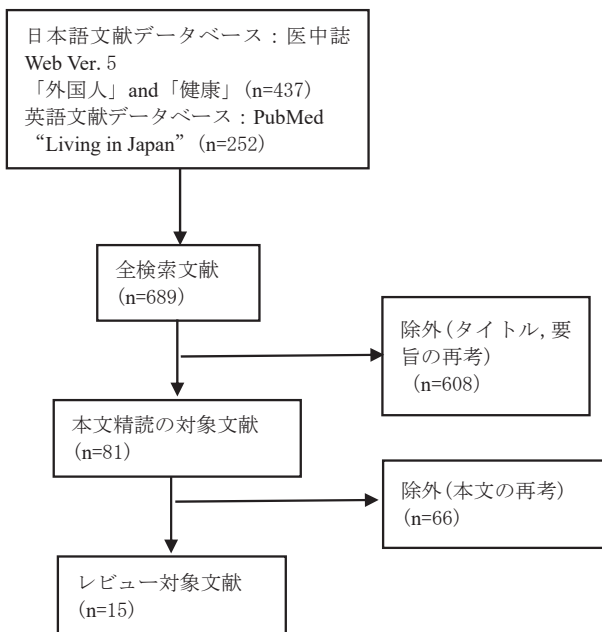


図1 対象文献の選定手順

3. 倫理的配慮

取り扱った文献については、著者の真意から逸脱することがないように留意し分析を行った。

III. 結 果

1. 文献の選定と概要

分析の対象は、2002年～2021年に発表された論文とした。対象となった文献の項目別文献数は表2のとおりである。研究対象者は、在留外国人の生活者、留学生、労働者等であった。研究領域は、公衆衛生学、看護学、精神医学等であった。調査対象となった在留外国人の出身国は、アジア圏が最も多く、中でも中国、フィリピンが多くを占めた。

研究デザインは量的研究と質的研究であった。以下、()内は表1に示した文献番号を表記した。出版年数では、在留外国人の増加のきっかけとなった、留学生30万人計画が開始した2008年を境に文献が増加していた。(表2) 2008年以前は、言葉の壁(3)、孤独やメンタルヘルス(1、2、6、13、14)に関する文献が多くみられた。それ以降も言葉の壁(8、10)やメンタルヘルス(9、15)に言及はされているものの、文化的な背景の理解(4、5、12)がされないことに対する文献が出てくるようになった。

2. 健康感を示すもの

研究対象となった15文献を精読し、健康感を示す項目を抽出した。抽出された項目は、精神的健康と病気・不調の有無であった。在留外国人が自らの健康感を質的に捉えた文献は少なく、自らの健康状態を指標によって評価し、捉えているものが多かった。

在留外国人は身体的な不調に加え、母国と離れて精神的な問題を抱えていることから、精神的な不調に関する文献が多かった。

1) 精神的健康

帰国後の将来(1、2)や子の成長や転職(6)といった将来への不安をストレスと捉えていた。また女性の方が男性よりもホームシックや孤独(13、9)を感じやすい(7、10)状況にあると示された。

2) 病気・不調の有無

自身の健康状態を、健康であるかそうでないか(8、11、15)、病気や不調があるかないか(3、4、12)で評価している。病気がないことを健康(3)とする一方、病気があっても仕事ができたら健康である(3)や、健

表1 レビュー対象となった文献リスト

| 文献番号 | タイトル, 雑誌名, 巻(号), 引用番号 | 筆頭著者 | 出版年 | 研究領域 |
|------|---|---------------|------|-------|
| 1 | 在日外国人女性の異文化ストレス要因と精神健康度調査 ¹¹⁾ | 大関信子 | 2006 | 看護学 |
| 2 | 青森において、中国語を母語とする留学生の異文化ストレス要因の分析と精神健康度 ¹²⁾ | 大関信子 | 2006 | 看護学 |
| 3 | 在日カンボディア人の健康観と医療施設利用時にもつ感情の特徴 ¹³⁾ | 糸井裕子 | 2008 | 看護学 |
| 4 | 在日フィリピン人女性の肥満に関連する食事・運動・睡眠・ストレス対処の行動とその認識 ¹⁴⁾ | 岡本優子 | 2018 | 看護学 |
| 5 | 外来通院中の中長期在留者が日本で2型糖尿病と共に生きる生活体験のあり様 ¹⁵⁾ | 橘里佳子 | 2020 | 看護学 |
| 6 | 在日中国人の身体的・精神的健康度と生活習慣—H市における健康ニーズ実態調査から— ¹⁶⁾ | 尾ノ井美由紀 | 2003 | 公衆衛生学 |
| 7 | 長崎における中国人工場労働者の鬱症状 (Depressive Symptoms in Chinese Factory Workers in Nagasaki, Japan) ¹⁷⁾ | Yutaka DATE | 2009 | 公衆衛生学 |
| 8 | 在日中国人留学生の保健行動に関する実態調査 ¹⁸⁾ | 久米絢弓 | 2010 | 公衆衛生学 |
| 9 | 在日外国人留学生の異文化ストレスと適応の分析 ¹⁹⁾ | 大関信子 | 2010 | 公衆衛生学 |
| 10 | フィリピン人技能実習生のメンタルヘルスに関連するリスク要因—文化変容方略に着目して ²⁰⁾ | 前田憲次 | 2018 | 公衆衛生学 |
| 11 | 中国人留学生の主観的健康状態と生活習慣 ²¹⁾ | 矢澤彩香 | 2019 | 公衆衛生学 |
| 12 | Interview survey of physical and mental changes and coping strategies among 13 Vietnamese female technical interns living in Japan ²²⁾ | Aya SHINOHARA | 2021 | 公衆衛生学 |
| 13 | 在留外国人の文化変容に伴うストレスと抑うつ—新来外国人を中心に— ²³⁾ | 深谷 裕 | 2002 | 精神医学 |
| 14 | 在日中国人大学院生における精神的健康度とその心理・社会的要因 ²⁴⁾ | 馬 斌 | 2007 | 精神医学 |
| 15 | 在日外国人の自覚的健康度について就労有無による影響 ²⁵⁾ | 劉 寧 | 2020 | 精神保健学 |

表2 レビュー対象文献の項目別文献数

| | | 文献数 (n=15) |
|--------|-----------|------------|
| 研究対象者 | 生活者 | 5 |
| | 留学生 | 5 |
| | 労働者 | 3 |
| | 留学生・労働者 | 1 |
| | 留学生とその他 | 1 |
| 研究領域 | 公衆衛生学 | 7 |
| | 看護学 | 5 |
| | 精神医学 | 2 |
| | 精神保健学 | 1 |
| 国籍 | アジア圏 | |
| | 中国 | 7 |
| | フィリピン | 5 |
| | ネパール | 2 |
| | ベトナム | 2 |
| | カンボディア | 1 |
| | モンゴル | 1 |
| | 北米 | |
| | アメリカ | 1 |
| | カナダ | 1 |
| 南米 | | |
| ブラジル | 2 | |
| その他 | 1 | |
| 研究デザイン | 量的研究 | 11 |
| | 質的研究 | 4 |
| 出版年 | 2002～2008 | 6 |
| | 2009～2021 | 9 |

※国籍については1文献中に複数の国籍があるためn=15とまらない。

康状態には運動習慣が関連している (11) という健康感が示された。また、病気があってもなんとかなる (5)、病気だと考えたくない (5)、病気だと考えるとより病気になる (5)、という病気がある状態を理解しているが向き合えない状態であることも示された。さらに自身の健康状態を、身体的不調や精神的不調があるかないか (14) で評価していた。

3. 健康感に影響する要因

健康感を分析した結果、在留外国人では母国での要因と日本での要因が健康感には影響していた。

1) 母国での要因

母国での要因は、基本属性、家族要因、文化背景、生活習慣と環境、疾病構造、心身の自覚、医療と教育の制度、が示された。(表3)

基本属性では、在留外国人の在留資格が難民 (3)、現病歴 (6)、が示された。家族要因では、子どもの有無 (10)、母国の家族の疾病体験 (4、5)、が示された。文化背景では、産後にシャワーを浴びない (3)、食習慣 (4、5)、母国の価値観 (4、5)、が示された。生活習慣と環境では、気候 (12)、と運動 (3)、が示された。疾病構造では、壮年期に亡くなる人が多い (4)、が示された。心身の自覚では、病識 (5)、が示された。医療と教育の制度では、教育制度 (3、13)、と医療システムの違い (5)、が示された。

2) 日本での要因

日本での要因は、個人の要素、生活面、制度面、社会面に大別された。(表4)

個人の要素では、基本属性、家族要因、心身の自覚、

表3 健康感に影響する要因：母国での要因

| | |
|----------|-------------------------------|
| 基本属性 | 在留資格が難民 現病歴 |
| 家族要因 | 子どもの有無 母国の家族の疾病体験 |
| 文化背景 | 産後にシャワーを浴びない 食習慣 母国の価値観 |
| 生活習慣と環境 | 気候 運動 |
| 疾病構造 | 壮年期に亡くなる人が多い |
| 心身の自覚 | 病識 |
| 医療と教育の制度 | 教育制度 医療システムの違い |

自身の将来、が示された。基本属性では、現病歴 (6)、過去の受診歴 (15)、が示された。家族の要因では、子供の有無 (10)、が示された。心身の自覚では、精神的な自覚 (13、14)、身体的な自覚 (1、5、12)、が示された。自身の将来では、帰国後の未来 (1)、が示された。

生活面では、金銭的負担、生活習慣と環境、が示された。金銭的負担では、経済的問題 (2、3、4)、と日本での支出 (12、13)、が示された。生活習慣と環境では、気候 (1)、日本での衣食住 (2、4、6、12、13、15)、忙しさ (4、12)、活動 (3、4、11)、が示された。

制度面では、言葉の壁で情報アクセス困難と医療制度の違い、が示された。言葉の壁で情報へのアクセス困難では、言葉の壁 (3、5、8、10、12)、と情報へのアクセス (1、2)、が示された。医療制度の違いでは、医療制度 (3、4、5、6)、受診の違い (5、12)、医療者との関係 (5)、が示された。

社会面では、つながり、労働環境、文化背景、が示された。つながりでは、情緒的つながり (8、14)、人的つながり (12、13、14)、社会的つながり (2、5、13、14)、が示された。労働環境では、雇用状況 (3、5、15)、労働時間 (3、7、12)、仕事のプレッシャー (12)、が示された。文化背景では、食文化 (3、4)、異文化での生活 (2、4、5)、が示された。

IV. 考 察

1. 健康感について

健康感自身の健康状態の良し悪しを評価し、身体面と精神面が含まれることが示された。また、健康感には母国での要因と日本での要因が影響していると分かった。

日本人の健康感²⁶⁾には収入、婚姻、学歴、勤続年数、健康診断の受診歴、健康上の相談をできる人がいる、などが影響する要因として報告されている。在留外国人の健康感でも、健康上の相談をできる人にあたる家族ネットワークや上司による受診の手助け²²⁾といった人的つながりや、経済的問題があげられる一方で、新たに基本属性、家族要因、疾病構造、文化背景、生活習慣と環境、心身の自覚、自身の将来、労働環境が影響要因として抽出された。

在留外国人は、日本という新たな環境・文化の中で生活習慣を確立する必要がある。仕事の影響で不規則な生活となることや、日本独特の気候や住居、食文化にとまどいながら、母国の文化を残しつつ移住の影響を受け、個人レベルでの文化が変容していくと考える。

個人レベルの文化変容にともなうストレスは、日本語

が理解できない、家族や友人が恋しい²⁷⁾等が要因となる。さらに、在留外国人は生活に必要な情報へのアクセスを不自由な日本語でしなければならず、孤立しやすい状態と言える。植村ら²⁸⁾は、日系南米人は友人や地域との付き合いは少なく、未就労者は特に孤立しやすいと述べている。在留外国人は、日本に在留することで文化変容に伴うストレス要因にさらされていると考える。

さらに、本研究では約7割がメンタルヘルス関連の文献であった。在留外国人は、来日後にホームシック、孤独、来日後の不安の増強といった精神的自覚があることが示された。在留外国人は個人レベルでの文化変容が求められており、メンタルヘルス不調に陥りやすいと考える。さらに、母国へ送金することにより経済的負担を抱えているものもいるため¹³⁾、帰国後の将来への見通しが立ちにくいことも精神的不調に影響を与えている可能性もある。

在留外国人の置かれている異文化への適応や移住、マイノリティゆえの経済的問題から在留外国人に特徴的な精神状況や健康課題に着目したものが多かったと考える。

在留外国人の多くはアジア圏の出身である¹⁾。アジア圏では感染性疾患が多いが、日本に居住し文化に適応し

変容していく中で、母国では身近ではなかった疾患と向き合うこととなる。

在留外国人は、身近でない疾患に対し身体的な自覚が乏しく、知識不足もあり、継続した治療や疾病予防の必要性に結びつかない現状があるのではと考える。在留外国人の疾病予防や早期受診のためには、母国の疾病構造や保健衛生の意識、教育や風習などの違いから、日本で培った保健衛生指導が活用できないことを示している²⁹⁾。そのため、対象者の文化背景に目を向け、理解した支援が必要である。

2. 今後の支援の検討

在留外国人が日本において疾病予防や早期受診など健康状態をコントロールするためには異文化への適応や移住、マイノリティゆえの経済的問題や、医療従事者をはじめ周囲の人の支援体制が整備されていないことが問題であると示唆された。

在留外国人は日本の医療機関で受診時に文書を求められる²²⁾等の受診の違いを実感しているだけでなく、日本語を理解できないことや、医療従事者の態度が患者を医療機関から遠ざけている可能性を理解し、対応していく必要があることが示唆された。医療従事者は多様な文

表4 健康感に影響する要因：日本での要因

| | | |
|-------|---------------|----------|
| 個人の要素 | 基本属性 | 現病歴 |
| | | 過去の受診歴 |
| | 家族要因 | 子どもの有無 |
| | | 心身の自覚 |
| | 自身の将来 | 精神的な自覚 |
| 生活面 | 金銭的負担 | 身体的な自覚 |
| | | 帰国後の未来 |
| | 生活習慣と環境 | 経済的問題 |
| | | 日本での支出 |
| 制度面 | 言葉の壁で情報アクセス困難 | 気候 |
| | | 日本での衣食住 |
| | 医療制度の違い | 忙しさ |
| | | 活動 |
| 社会面 | つながり | 言葉の壁 |
| | | 情報へのアクセス |
| | | 医療制度 |
| | 労働環境 | 受診の違い |
| | | 医療者との関係 |
| 文化背景 | 情緒的つながり | |
| | 人的つながり | |
| | 社会的つながり | |
| | 雇用条件 | |
| | 労働時間 | |
| | 仕事のプレッシャー | |
| | 食文化 | |
| | 異文化での生活 | |

化の中で個別性に配慮した医療提供が必要であると示唆された。

V. 結 論

日本に在留する外国人の健康行動における健康感とその関連要因を明らかにするため、国内外15件の文献検討を行った結果、以下の2点が明らかになった。

1. アジア圏の在留外国人の健康感、精神的健康度、病気・不調の有無により示されていた。
2. 健康感に関連する要因は、母国での要因と日本での要因に影響を受け評価されていた。

母国の疾病構造の違いに加え、異文化への適応や移住、経済的問題やソーシャルサポートの不足が、在留外国人の疾病予防や早期受診を困難にしていることが示唆された。日本の医療従事者は、在留外国人の文化背景に注目した支援体制の整備をする必要がある。

VI. 本研究の限界

在留外国人の研究は、アジア圏の外国人を対象とした文献が多く、本研究でもアジア圏の外国人を主に対象とした文献研究を行った。欧米や医療先進国の外国人の健康感についてはさらに研究が必要であると考えられる。

本研究において使用したデータベースは医中誌 Web Ver.5とPubMedであったことから、限られたデータベースでの検索であり、調査ではない記述物が含まれておらず、その範囲に限界があったと考えられる。しかしながら、アジア圏の在留外国人の健康感と健康感に影響する要因を明らかにしたことで、今後、在留外国人の疾病予防の支援の方向性を示し、さらなる研究の可能性を広げた意義は大きいと考える。

付 記

この論文は島根大学大学院医学系研究科看護学専攻博士前期課程の修士論文を加筆修正したものであり、成果の一部を第7回世界看護科学学会学術集会で発表した。

文 献

- 1) 出入国在留管理庁．令和元年末現在における在留外国人数について．http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00003.html．(アクセス日 2021.8.19)．
- 2) 出入国在留管理庁．入管法及び法務省設置法改正に

ついて．<https://www.moj.go.jp/isa/content/930001399.pdf>．(アクセス日 2021.10.21)．

- 3) 是川夕．外国人の定住化が死亡動向に与える影響について：在留資格別人口の変動からの分析．人口学研究 2011;47:1-23. doi: 10.24454/jps.47.0_1.
- 4) 厚生労働省．平成26年度人口動態統計特殊報告「日本における人口動態－外国人を含む人口動態統計－」の概況．<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/gaikoku14/index.html>．(アクセス日 2021.8.22)．
- 5) 出入国在留管理庁．在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表．http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html．(アクセス日 2021.10.22)．
- 6) 浅井美千代, 青木きよ子, 高谷真由美, 他．我が国における「慢性疾患のセルフマネジメント」の概念分析．医療看護研究 2017;13(2):10-21.
- 7) 中嶋知世, 大木秀一．外国人住民における健康課題の文献レビュー．石川看護雑誌 2015;12:93-104.
- 8) 森口次郎．外国人労働者が働く中小企業における産業保健活動：外国人労働者の職場の安全衛生．産業医学ジャーナル 2020;43(3):31-35.
- 9) 平野裕子．在日フィリピン人労働者の受診行動に関する研究．九州大学医療技術短期大学部紀要 1998;25:11-20.
- 10) 甲斐一郎．健康観と健康感．日本健康医学会雑誌 2008;17(2):1.
- 11) 大関信子, 牛島廣治, アラン・ノールズ, 他．在日外国人女性の異文化ストレス要因と精神健康度調査．女性心身医学 2006;11(2):141-151. doi: 10.18977/jspog.11.2_141.
- 12) Oseki N, Knowles A, Hiroshi U, *et al.* 青森において、中国語を母語とする留学生の異文化ストレス要因の分析と精神健康：Analysis of transcultural stress factors and the mental well-being of foreign Chinese-speaking students in Aomori. 青森県立保健大学雑誌 2006;7(1):9-16.
- 13) 糸井裕子．在日カンボディア人の健康観と医療施設利用時にもつ感情の特徴．日本看護医療学会雑誌 2008;10(1):55-64. doi: 10.11477/mf.7009200024.
- 14) 岡本優子, 樋口まち子．在日フィリピン人女性の肥満に関連する食事・運動・睡眠・ストレス対処の行動とその認識．日本地域看護学会誌 2018;21(3):6-14. doi: 10.20746/jachn.21.3_6.
- 15) 橘里佳子, 畠中香織, 河井伸子, 他．外来通院中の中長期在留者が日本で2型糖尿病と共に生きる生活体験のあり様．日本看護科学会誌 2020;40:661-671. doi: 10.5630/jans.40.661.
- 16) 尾ノ井美由紀, 斯琴, 早川和生．在日中国人の身体

- 的・精神的健康度と生活習慣：H市における健康ニーズ実態調査から．日本地域看護学会誌 2003;5(2):70-78. doi: 10.20746/jachn.5.2_70.
- 17) Date Y, Abe Y, Aoyagi K, *et al.* 長崎における中国人工場労働者の鬱症状：Depressive Symptoms in Chinese Factory Workers in Nagasaki, Japan. *Industrial Health* 2009;47(4):376-382. doi: 10.2486/indhealth.47.376.
- 18) 久米絢弓, 西川まり子, 大久保一郎. 在日中国人留学生の保健行動に関する実態調査．国際保健医療 2010;25(3):171-179. doi: 10.11197/jaih.25.171.
- 19) 大関信子, ノールズ・アラン, 浅田豊. 在日外国人留学生の異文化ストレスと適応の分析：Analyses of Stress and Adaptation of Foreign University Students in Japan. 日本ヒューマンケア科学会誌 2010;3(1):25-39. doi: 10.50922/jjahcs.3.1_25.
- 20) 前田憲次. フィリピン人技能実習生のメンタルヘルスに関連するリスク要因：文化変容方略に着目して．国際保健医療 2018;33(4):303-312. doi: 10.11197/jaih.33.303.
- 21) 矢澤彩香, 常盟. 中国人留学生の主観的健康状態と生活習慣：Subjective health status and lifestyle habits of Chinese international students in Japan. 医学と生物学 2019;159(3):1-11.
- 22) Shinohara A, Kawasaki R, Kuwano N, *et al.* Interview survey of physical and mental changes and coping strategies among 13 Vietnamese female technical interns living in Japan. *Health Care for Women International* 2021:1-17. doi: 10.1080/07399332.2021.1963966.
- 23) 深谷裕. 在留外国人の文化変容に伴うストレスと抑うつ：新来外国人を中心に．日本社会精神医学会雑誌 2002;11(1):11-19.
- 24) 馬斌. 在日中国人大学院生における精神的健康度とその心理・社会的要因．順天堂医学 2007;53(2):200-210. doi: 10.14789/pjmj.53.200.
- 25) 劉寧, チメドオチル・オドゲレル, 居林興輝, 他. 在日外国人の自覚的健康度について：就労有無による影響．産業医科大学雑誌 2020;42(3):267-274. doi: 10.7888/juoeh.42.267.
- 26) 鈴木真美子, 酒井博子, 福田吉治. 健診結果に基づく事業場労働者の医療機関受診につながる要因．産業衛生学雑誌 2019;61(6):247-255. doi: 10.1539/sangyoisei.2018-042-B.
- 27) 糸井裕子. 在日カンボディア人の文化変容にともなうストレス．日本保健福祉学会誌 2007;14(1):51-58. doi: 10.20681/hwelfare.14.1_51.
- 28) 植村直子, マルティネス真喜子, 畑下博世. 在日ブラジル人妊産婦の日常生活と保健医療ニーズ：妊婦健診・家庭訪問でのフィールドワークより．日本公衆衛生雑誌 2012;59(10):762-770. doi: 10.11236/jph.59.10_762.
- 29) 辻よしみ, 小林秋恵, 三木佳子, 他. カンボジアにおける保健衛生指導活動に参加した学生の経験．香川県立保健医療大学雑誌 2021;12:49-55.

(受付 2022年9月12日)